

岩内町郷土館 令和5年度 第二回企画展

岩内黒澤写真館とレトロカメラ ～郷土館お宝・珍品展part 9～



黒澤家 昭和十四、五年頃

1887（明治20）年創業。
2009（平成21）年の閉店まで122年、
父子4代にわたり岩内町で写真館を営んでいた、
岩内黒澤写真館の歴史を紹介します。さらに、郷土館
所蔵の暗箱カメラ、レトロカメラ、ガラス乾板や銀板、明治
大正、昭和時代の古写真など、お宝・珍品再発見の企画展です。

開催期間：令和5年（2023） 6月24日（土）～8月27日（日）



展示状況（企画室北側）

ご挨拶

幕末開港と同時に、外国から我が国に流入してきた「写真術」は、北海道でも1858（安政5）年に、外国船寄港地函館に伝わりました。ロシア領事のゴスケウィッチが函館の木津孝吉に写真術を伝え、さらにロシア人医師であったゼレンスケから田本研造に。両者は明治元年、二年にそれぞれの写真館を開業します。

函館に遅れること二十年。進取の気質を擁する岩内人も、その新しい技術に進んで乗り出しました。ニシン漁業全盛期の1887（明治20）年、黒澤写真館の誕生です。

「見える景色がそのまま写し取られ、永久に保存される」という写真技術は、当初はカメラ機材も材料も、大変高価なものでした。資産家であった初代館主の黒澤（澄田）喜代定は静岡からの移住者で、岩内では最初、お茶の商いをしていました。趣味であった写真撮影を本業に切り替え、後志で初の、北海道では四番目の写真館開業となりました。写真撮影が、一枚6～8万円という明治時代ですが、この頃撮影された写真で「黒澤写真館」銘入台紙の立派なものが、郷土館には大量に収蔵されており、当時岩内がいかに、経済的に豊かな町であったかということが歴然とします。

今はスマホで、誰でも簡単に写真のとれる時代ですが、写真撮影は真剣勝負（！）暗室で印画紙を準備し大きな暗箱カメラを持ち運び、ピント合わせもシャッタースピードも、一から十まですべてが手作業、現像もまた手作業で、ちょっと間違えたらすべてバー（！）、親方の怒号が飛ぶ…という、昔の写真技師の人々から見れば、現代は想像を絶する技術の進歩であるでしょう。

しかし、写真技師という職人気質は、黒澤写真館の百二十年余りの長い歴史の中、歴代の館主の中にたしかに息づいていました。2008（平成20）年に逝去された最後の館主允晴氏は、平成時代に「現存する北海道最古の写真館」として、さまざまな新聞雑誌に紹介されました。その中でこんなお話をされています。「老舗としての誇り、継いで守っているという自信。だから守ってこれたのかもしれませんね。でもそれだけではありません。今はカメラも普及し、写真館の利用は減っていますが、写真館で写す記念写真は、特別な意味があると私は信じています。」

誕生、成長、結婚、歳祝いなど、人々が人生の節目に残してきた写真は、そのプライベートな中でこそ大切にされ、価値のあるものですが、古い写真の中には町の歴史を物語る貴重な情報を、ひそかに隠し持っているものもあり、古写真の中からは常に新しい発見があります。「情報（データ）」「物語（ヒストリー）」そして時に「芸術性（アート）」を、たった一枚の中に表現する写真技術というものの素晴らしさを、改めて感じます。

この度の企画展では、旧黒澤写真館四代目館主、故黒澤允晴さんのご家族（札幌在住）からの資料ご提供をはじめ、珍しいカメラ機材のご提供など、多くの方にご協力をいただきました。ここにあらためて御礼申し上げます。

2023(令和5)年6月24日
岩内町郷土館



マグネシウムフラッシュ、手動シャッターなど
暗箱カメラの道具



銀板写真とガラス乾板（郷土館所蔵）



黒澤写真館歴代館主の記録



右よりホビフレックス二眼レフカメラ（佐藤英行氏所蔵）、マミヤRB67（濱上俊治氏所蔵）、1910～1913米コダック製フィルムカメラ（郷土館）



展示状況（企画室南側）



「岩内港」を背負った写真館銘入半纏

(右) 黒澤写真館の半纏(はんてん)。明治時代のもの。当時は写真技術は特殊技能、職人仕事であった。黒澤写真館は、1887(明治20)年に当地で初めて開業した写真館で、裾の文様には「岩内港」の文字がある。岩内がまだ「町制(施行は明治33)」になっていない頃であり、「港」を中心とした人々の暮らしと文化のあった、時代の名残りをとどめている。



初代館主 黒澤 喜代定
(旧姓 澄田)



妻 カネ



二代目館主 黒澤 富三郎
(旧姓 石井)



妻 スミエ



三代目館主 黒澤 隆



妻 光枝

黒澤写真館歴代館主と写真技師戸井勝富氏

初代黒澤喜代定は、静岡市中草深町より岩内へ移住。徳川お膝元の、武士の家柄であった。初めはお茶の商売であったが、写真術の趣味が高じ本業とする。以来122年にわたり、岩内の人々、町の様子を撮影した写真館となる。



四代目館主
黒澤 允晴

六人兄弟の三男。中学卒業後すぐに家業につく。三代目没後札幌で修業を積み、以来50年余「現存する北海道最古の写真館」を守る。一級婚礼写真師。

写真技師 戸井 勝富

喜茂別町出身。俱知安内田写真館から、縁があり黒澤写真館へ。四代目允晴氏が札幌への技術修行で、館主不在となり、その数年間留守を守った。以来、1984年48歳で亡くなるまでの27年間、黒澤写真館に貢献した。





黒澤写真館の暗箱カメラ（郷土館常設展示）



繰り上げ台付室内用木製暗箱カメラ
(メーカー不詳)
レンズ: カールツァイス社製 TESSA
R (テッサー) 300mm



繰り上げ台付室内用暗箱カメラ
タチハラ Hope アンソニー A型 (東京立原写真機製作所)
レンズ: UNIVERSAL HELIAR 360mm

(左) 出張用木製三脚小型 (キャビネ判暗箱カメラ)
(右) 出張用木製三脚中型 (ハツ切判暗箱カメラ)
いずれもタチハラ Hope アンソニー A型 (東京立原写真機製作所)



アグファ閃光器
(マグネシウムフラッシュ)



乾板箱



三脚ケース



薬品用グラム秤



ルーペ



フィルム入れ (八つ切り用、
四切用、キャビネ用)



幕シャッター



出張用暗箱カメラ (八つ
切り、閉じた状態)



レンズ



カメラおよび周辺機器は2008(平成20)年4月、黒澤写真館より岩内町郷土館へ寄贈されたもの



明治・大正時代の古写真（黒澤写真館撮影）

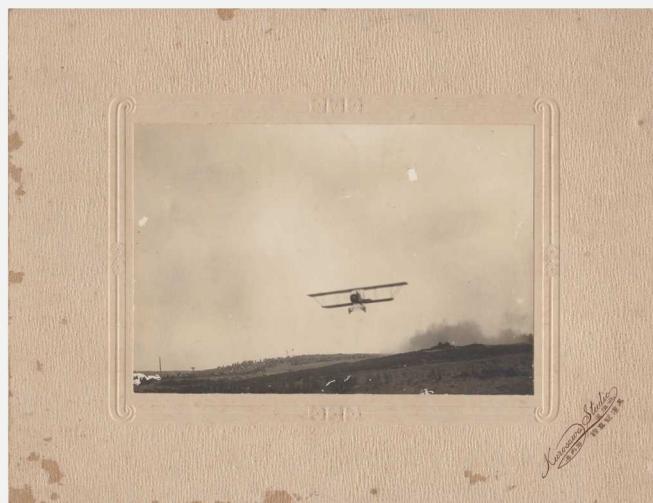
郷土館収蔵の明治大正古写真150枚のうち、50枚以上が「黒澤写真館」銘入台紙で確認された。



一部
拡大
⇒



1900（明治33）～大正時代 岩内大浜付近とみられる写真。黒澤喜代定撮影。岩内沖に大型汽船が黒煙をあげ、周囲に小さな駁船が写る。白い帆を上げた帆船も見られる。



一部
拡大
⇒



1919（大正8）年6月15日、高橋信夫飛行士が岩内町にて凱旋飛行。初めての飛行機に、町内外からの200名余の観衆が熱狂した。発着点の鷹台グラウンド（今の旧中央小グラウンド）下方から、飛び立つ飛行機と群衆を撮影した、貴重な写真。
(黒澤写真館名入台紙)

1914（大正3）年
黒澤写真館編集発行
「北海大観 第一集」

鉄道、築港が完成し、産業ますます隆盛となる岩内と近隣の町村を撮影、編集した写真集。

123ページ約240枚の写真が掲載されている。



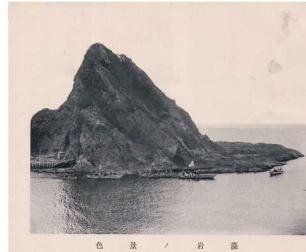
（梅澤邸本店）



（三井岩雄登硫黄鉱山）



（北海道拓殖銀行代理店）



（盆村茂岩）



（岩内漁港修築事務所）



（俱知安隧道）



古地図、古資料に見られる黒澤写真館



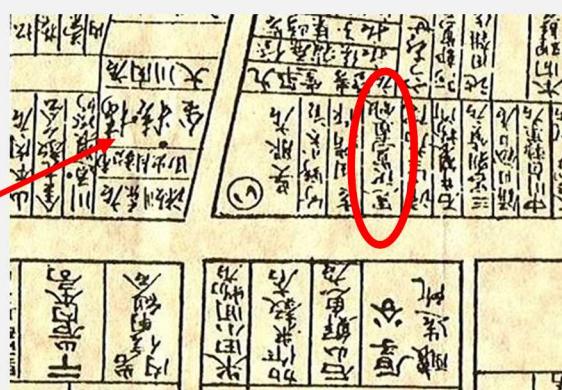
1911 (明治44) 年岩内市街図



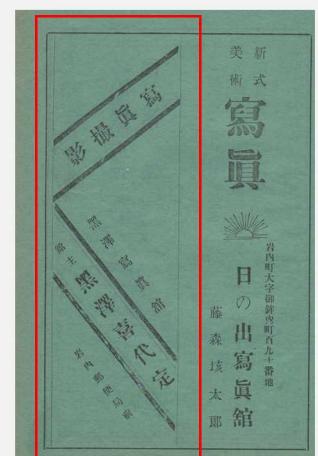
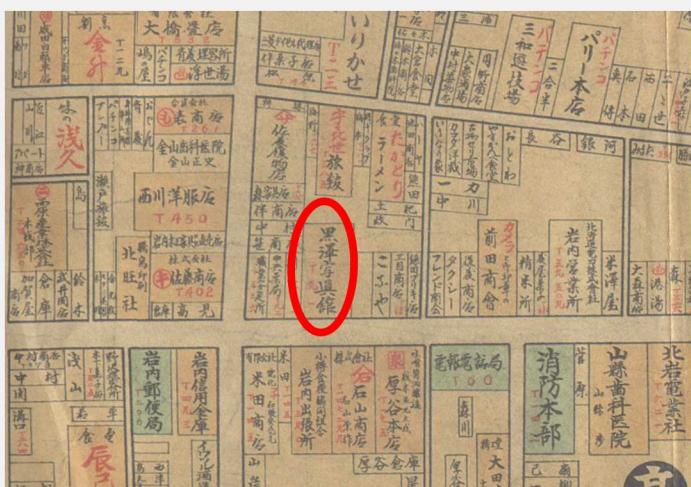
1909 (明治42) 年市街図掲載の黒澤写真館

明治40年代、中央通り交差点
馬車鉄道の写真 (郷土館所蔵)黒澤写真館「北海大観 (大正3)」
より金精楼の写真

1887 (明治20) 年創業の黒澤写真館は元々、現在の国道229号沿いの中央通り交差点西側（料亭「金精樓」付近）にあったが、昭和5年地図では、交差点の東側に移っている。その後は同じ場所で継続。写真館の歴史を地図で見ると、120年余りの町の変わらぬ様子が見えることが出来る。



1930 (昭和5) 年、岩内市街図

「岩内古字俱知安要覽
(明治41)」掲載の広告

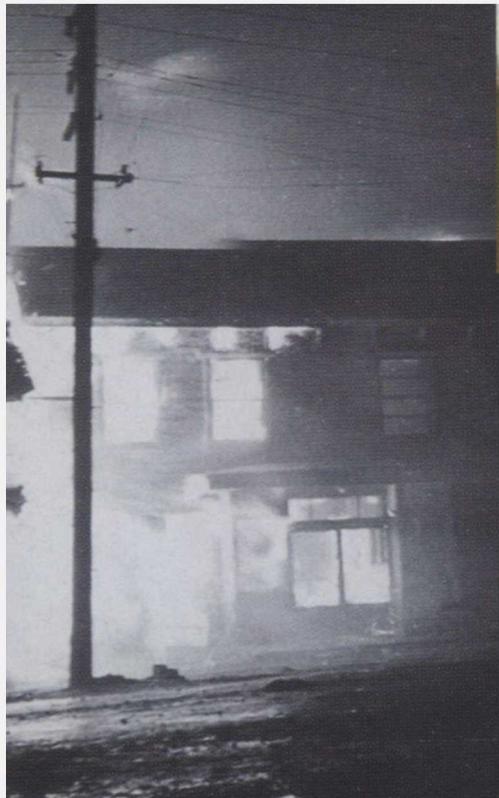
1953 (昭和28) 年、大火前年の岩内市街図



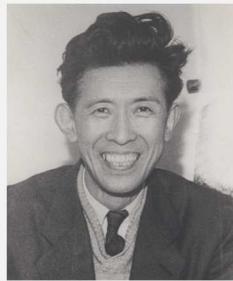
昭和時代、大火前の黒澤写真館。白木造りの洋館風建物



三代目館主黒澤隆と岩内大火（1954. 9. 26）



昭和29年9月26日。黒澤 隆氏が撮影した、焼け落ちる黒澤写真館。



三代目 黒澤 隆

黒澤写真館三代目館主、隆氏は英語が堪能で、終戦後、岩内に進駐した進駐軍相手に、撮影の仕事をした。兵士が本国の家族へ送るためのポートレートを撮影、米軍兵のお客が行列したという。

また1954年の岩内大火では、住居兼写真館が全焼被災した。この時隆氏は、先代から伝わる貴重なカメラ機材を持ち出した。また道路の反対側から、写真館が燃え落ちる様子をカメラで撮影していた。



※岩内大火…1954（昭和29）年9月26日、洞爺丸台風と呼ばれる激しい台風の嵐の中、失火による火災が岩内町を襲い、一晩で町の八割を焼失した。死者35名。罹災者1万7千人余。



岩内大火直後に、仮店舗再建した黒澤写真館。右写真には、建設中の劇場「遊楽館」と白看板には「黒澤写真館建設地」と書いてある。



1959（昭和34）岩内市街図



新築された、二階建ての黒澤写真館



1985（昭和60）岩内市街図



写真館が歩んだ122年～岩内町民とともに

学校写真



昭和九年。岩内尋常高等小学校（男子学校）卒業アルバム



大正時代。岩内尋常高等小学校（男子学校）クラス写真



寺院、教会



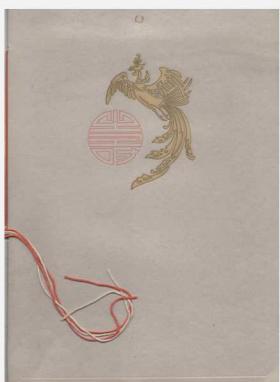
明治27年。帰厚院鐘供養。旧姓「澄田」喜代定の印あり



明治時代。岩内メソジスト教会



婚礼写真



郷土館所蔵山本孝治資料より。
四代目館主も一級婚礼写真師の
資格を保有し「婚礼写真なら黒澤」の評判が高かった。



歳祝い

子供の誕生から歳祝い、入学進学など成長の節目で写真撮影をした町民は多く、親子三世代で撮影に来る人もいたという。



1999（平成11）年7月12日付
北海道新聞



岩内黒澤写真館は、平成時代に「現存する北海道最古の写真館」として注目を集め、多くの取材を受け紹介された。町の歴史と人々の歴史を撮り続け、代々受け継がれてきたが、四代目館主黒澤允晴氏が病に倒れ2008（平成20）年逝去。翌2009（平成21）年に閉館となる。允晴氏は毎年恒例仕事だった「岩内二中卒業アルバム」編集に取り組み、病をおして最後まで仕事をしたという。

以下は、允晴氏の奥様のお話。

「広報いわない」
平成19年1月



道内で一番古い写真館の主 いい写真を撮り続けたい

今回は、町内で唯一の写真館を営む黒澤允晴さんにお話を伺いました。黒澤写真館は、明治20創業で現存する中では道内最古の写真館です。

【お父さんの跡を継いだわけですね。

私は4代目ですが、6人兄弟の3男で、父を継ぐのは次男だと思っていた。それが中学を卒業して父を手伝うすることになったのですが、それまではカメラを持ったこともなかったんですよ。撮影技術は父から教わりました。父の死後、稼業を継ぐため修行に出ました。修整技術に不安があったんです。私たち技師が使っているカメラには肉眼では見えないシミが写るんです。それをきれいにして自然に見えるように修整する。修整は修行で身につけた自信のある技術です。私はコンピュータを使わず鉛筆1本でやっています。

【一番心がけていることは何ですか？

やはり勉強ですね。機材が変わると技術も変わりますから、光のこと、婚礼写真のことなど常にいい写真を撮ってお客様に満足してもらうには、勉強は欠かせません。

現在は、こどもが少なくなった影響も大きい、デジタルカメラが出てきて自分でプリントする時代ですから写真館にとっては大変な時代です。

しかし、そんな時代だからこそ、より美しい写真でお客さんに満足してもらうことが大事だと思っています。そのため、長年蓄えてきた技術ですから。

【仕事を通じてうれしかったことは

お客様の、小学校入学から成人、そして婚礼など人生の節目節目に写真を撮ることで、その人の成長を見ることができますので本当にうれしいですし、楽しいですね。

「集合写真を撮るときには、シャッターを押すまでがかなり長いんです(笑)。ちょっとした衣服のズレや手元をきれいに直していただいたら、上から下までチェックしてなかなか撮影に入れないでの、写される側も困っていたほどでした。そのくらいこだわっていました。」

「波稻」
平成8年7月
平成20年3月



「でも、やっぱり出来上がった写真を見ると、誰も文句のつけようのない最高のものが出来るんです。子供の成長の写真、婚礼写真の仕事もたくさんありました。最後は病を押しても仕事をして、もうこれ以上はという、最後までシャッターを押し続けていました。」



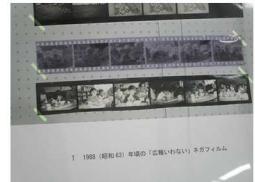
2009（平成21）年閉館直前の黒澤写真館



写真館内スタジオと機材



レトロカメラと郷土館お宝・珍品展 (part9)



国産各メーカーのフィルムカメラと36mmネガフィルム

郷土館収蔵品と町内佐々木さんより新たに寄贈されたフィルムカメラを展示しました。



↑銀板写真（ダゲレオタイプ）
西村氏寄贈。昭和30年代の町並み
や車滝、旧役場庁舎の貴重な写真



ガラス乾板

昭和9年、岩内見番芸者による
「岩内音頭」の舞踊風景や旧消防署の写真。画像復元は当時技術を持っていた黒澤写真館に依頼された。



←巣谷一六の揮毫した中国漢詩の襖（川村家
寄贈）。一六は児童文学学者巣谷小波の父で
「明治の三筆の一人」と呼ばれた名書家。

右写真は、暗箱カメラのピントガラスに被写
体が逆さまに写る様子を展示。

8月1日より、お宝珍品を增量展示！ 普段はしまつてある資料を公開する、毎年恒例の「郷土館お宝・珍品展」は今年で9回目となりました。近年寄贈された「明治時代の接種証明」「泉天狼筆短冊」「昭和初期の小学地図帳」など、貴重なお宝珍品をこの度初展示しました。



岩内黒澤写真館歴史年表 (他関連項目)

年	黒澤写真館と道内の写真業	備 考
1854 (安政 1)	○ペリー一箱館来航、日本最古の銀板写真「松前藩士」撮影される	
1858 (安政 5)	○露領事ゴスケウィッチ函館に着任し、函館木津孝吉に写真術を伝える	○安政五カ国条約
1862 (文久 2)	○函館の田本研造が、露国医者のゼレンスケから写真術を学ぶ	
1864 (元治元)	○木津孝吉、写真館を開く	
1868 (明治元)		○明治維新
1869 (明治 2)	○田本研造、写真館を開く	
1887 (明治 20)	○岩内黒澤写真館 開業 初代館主 黒澤 (旧澄田) 喜代定	
1900 (明治 33)		○岩内町町制施行
1914 (大正 3)	○黒澤写真館より写真集「北海大観 第一集」を編集発行	
1929 (昭和 4)	○初代没 二代目館主 黒澤 (旧石井) 富三郎	
1941 (昭和 16)	○二代目没 三代目館主 黒澤 隆	
1945 (昭和 20)	○岩内南河旅館に米進駐軍が駐留する。故国に写真を送るため、米兵が毎日のように来館した	○第二次大戦終戦
1954 (昭和 29)	○岩内大火発生。写真館被災、店舗住宅が全焼する。隆氏に持ち出された歴代のカメラ機材は焼失を逃れる	
1957 (昭和 32)	○俱知安内田写真館より、戸井勝富技師が黒澤写真館に移る。	
1959 (昭和 34)	○三代目没 四代目館主 黒澤 允晴	
1960 (昭和 35)	○4代目允晴氏、美唄、札幌の青葉写真館へ修行に出かける。	
1984 (昭和 59)	○戸井勝富技師逝去	
1990 (平成 2)		○デジタルカメラ誕生
2008 (平成 20)	○四代目 允晴氏逝去	
2009 (平成 21)	○黒澤写真館 閉館	

令和5年(2023)6月22日作成 ○参考資料:黒澤優子氏提供資料、岩内町史、岩内史年譜



この度の企画展開催に際しご協力を頂いた
皆様に心より感謝申し上げます（敬称略）

黒澤 優子	佐藤 英行
黒澤 克哉	濱上 俊治
黒澤 晃	佐々木利幸

2023（令和5）年度岩内町郷土館
第二回企画展「岩内黒澤写真館とレトロカメラ
～郷土館お宝・珍品展part 9～」

2023年9月30日発行

編集/発行 岩内町郷土館（ぱとりあ岩内）
岩内町清住5-3
TEL 0135(62)8020